

● 現在、日本の多くの教会は牧師不足や礼拝出席者の減少といった深刻な課題に直面しています。そうした中であって、伊丹教会の歩みが堅く支えられていることは、神の特別な導きと励ましであり、教会が内向きになるのではなく、福音の使命に立ち返り、社会へと仕え出ていくための力として受け取るべき恵みです。

● 20世紀の神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは、「教会が教会であるのは、それが他者のために存在するときだけである」と語り、自己保存や独善に陥る教会の危険を指摘しました。彼は、ナチスの弾圧下で迫害される人々と共に歩み、教会の本質が「他者のための存在」であることを生涯を通して証しました。

● 今日の聖書箇所では、イエス様が十字架に向かわれる直前、弟子たちが「神の国」をこの世的な栄光と誤解している様子が描かれています。ヤコブとヨハネの母の願いに対し、イエス様は「このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか」と問いかけます。この「杯」は、旧約聖書でたびたび語られるように、神のさばきや苦難の象徴です。イエスはその「苦い杯」を、自らの意思で引き受けられ、すべての人の罪の代価として自らの命を差し出されました。ここに、キリストの王権の逆説的性格が明らかになります。イエスの「王としての道」は、支配でも栄光でもなく、仕えること、そして十字架を負うことに他なりません。

● イエス様がゲツセマネで、「死ぬほど悲しい、一緒に祈ってほしい」と弟子たちに語られたことを思い起こします。イエス様は痛みを共有する人と人との交わりに神の国の現れがあることを示そうとされたのです。孤独な英雄ではなく、共に苦しみ、祈り、支え合う関係の中にかこ、福音の力が働くのです。

● 讃美歌 540 番「主イエスにより」(原題:Blest Be the Tie That Binds)は、18世紀英国のジョン・フォーセット牧師によって書かれました。彼は名誉や多額の報酬よりも、信徒たちとの絆を選び取りました。この讃美歌が歌うのは、キリストの愛によって結ばれた交わりの尊さであり、互いの痛みを担う関係性こそ、神の国の霊的リアリティであるということです。新しい年度を迎える今こそ、私たちは「痛みを担い仕え合う教会」としての歩みを新たにしたいと願います。教会は「制度」でも「閉鎖的な組織」でもなく、神の恵みによって結ばれた絆の広がりゆく共同体です。この絆を深め、主の愛をもって隣人に仕える歩み続けましょう。